

## イスラームのひとびとと生活 -シルクロードをたどる-

片倉 邦雄



ヒトコブとフタコブらくだなのであ

私は約40年の間、中国、中央アジアを飛び越して中近東に通っていた。シルクロードはほんの通過地点に過ぎず、専らアラブ人、ペルシャ人とつき合ってきた。しかし、日本とこれらの国々との間にあるシルクロード地域についてはポツカリ穴があいていた。無知、疎遠の地帯だった。

ところが2002年8月初旬、北京で中韓日合同中東学会（AFMA）が開催される機会に中国と中央アジアへ行った。中国社会科学院のアレンジで北洋軍閥、段祺瑞住居跡にほど近い、和敬府賓館会議場で三日間にわたり真剣に西アジアに関わる議題について報告が行われ、特に日本側から初期イスラーム教徒の思想と行動、中国の回民運動などについても活発な議論が展開された。一日の会議が終わると日本からの参加者はムツとした熱気に包まれた大通りを散策し、ウイグル回族経営の焼肉屋でパイカル片手に羊の串刺しをほおばった。

次の目的地は雲南省昆明（クンミン）。こ

こには20年来の友人、回民の馬さんが待っていた。かつて、馬さんは日本語習得のため政府留学生として日本にやってきた。そして私は日本人イスラーム教徒の草分け、故ハッジ・ムスタファ小松不二男氏から紹介されたのだった。

馬さんは北京大学第二語学院時代の同級生ロシア系ウズベク人女性と結婚していた。まるで妖精のような丸い瞳、白い肌のお嬢さんイブを連れて迎えに来てくれた。

雲南は、寧夏回族、新疆ウイグル自治区回族と同様、古い歴史と伝統のあるイスラーム教徒の集中地域だ。順城街の古清真寺（写真1-1~2）に案内され、導師（アホン）と白い帽子をかぶった回民教徒の集まりと祈祷の状況を観察した。

他方、この雲南にもグローバル化、「香港化」の波が押し寄せていることに気づいた。

道を掃除するくわえ煙草、ハイヒール姿の清掃婦、ホテルの玄関前にベンツの超大型車がこれ見よがしに並んでいる。消費財の氾濫、マーケットには何でもあるから日本から買っ



写真1-1 金曜礼拝のあとの回民信徒の談らん



写真1-2 順城街清真寺金曜礼拝  
青少年の顔もみえる

てきてもらいたいものは何もありません…と言われた。

当地回民の源流をたどると…元代、ジンギスハーンからここに司政官として派遣されたのがウズベクスタン、ブハラ出身のアラブ人サイエド・エジャール・シャムスディーンだった。かつてモンゴル軍によってブハラが蹂躪されようとした時、この人はジンギスカーンに直訴した結果、多くの人々が救われたとされる。サイエド（賽典赤）は雲南の長官として善政をしき「清廉宰相」の名で知られた。徳望を慕ってブハラ当地に移住するもの20万人に上ったそうだ。昆明の郊外、「五里多」というところ、小学校の校門外の台地に苔蒸す堂々とした墓碑が残っている。

ペルシャ湾バハレーン沖まで遠洋艦隊を率いて航海し、巡礼のためメッカに代表を送ったと伝えられる明代提督、鄭和も雲南出身の回族といわれる。

一見大理山系に囲まれたどんづまりの土地柄とみられるが、実はこの地域はミャンマーへのルートと繋がっており、インド洋沿岸の港を経て巡礼・交易の航路が開かれていたというわけだ。馬さんはタイのチェンマイにもイスラーム教徒の親戚筋が多いと言っていた。

中国回民は共産党体制下、特に文化大革命の時期には最も厳しい弾圧を受け、回教運動

はほとんどが迷信として強制停止させられた。この昆明においても清真寺院は信仰の場ではなくなり、機械部品工場などに転用されてしまった。馬さんの両親は公務員だったので、信仰を隠して何とか切り抜けた。馬さん自身も日本留学の際も地区共産党支部の推薦を受けるために回教出身であることを申告しなかったといていた。

9・11米国同時多発テロを契機に新疆自治区で「民族分裂主義者」の取締りが強化されたことは記憶に新しい。約2000万人のイスラーム系民族を抱える中国としては、イスラームを主要な生活規範とする少数民族をいかに「中華民族」の一部として統合していくか依然として党、政府にとって頭痛の種といえよう。

ウサマ・ビンラーデンのTシャツはこの地域の青少年にとってなかなかの人気らしい。ファッションの一種として家の中で着られている。とはいえ中央政府は国際テロ取締りの一環としてけっこう神経を尖らせているとのことだ。

### 知識は中国まで求めよ

モハンマドのことばとして「学問は遠く中国にあるが、行き求めるべし」というのがよく知られている。七世紀イスラーム教が誕生

して以来、イスラーム文明ははるかな中国(唐朝)に強い関心をもっていた。アラビア半島およびイラン高原から来た大食国(タージャー)と波斯国(ペルシャ)の商人、布教者、軍人、旅行者のなかには確かにイスラーム教徒が多かったようだ。

首都長安は宗教信仰の自由が認められていたので、キリスト教ネストリウス派、ゾロアスター教(拝火教)、摩尼教などの宗教が多く存在したが、イスラーム教以外の各宗教は時間の経過とともに勢力が弱まり、結局消滅してしまった。おそらく、わが国遣唐使阿倍仲麻呂などはるか故国に思いをよせ、たまにはいわゆる「胡姫」の経営をする飲み屋で異国情緒を楽しみ、李白のように「落花踏尽」して憂さを晴らしていたに違いない。

確かに「知識を中国まで求めて」多くのイスラーム教徒、回回人は陸路、あるいは海路、中国に渡った。13世紀を迎え、北アジアの草原に住む遊牧民の騎馬軍団が中国全土を制覇しようとしたとき、この元朝と協力して重要な役割を果たしたのは回族だったといわれる。元の將軍で西域に詳しいウイグル人の阿里海涯(アリ・カヤ)は、「回回砲」の使用を勧めた。南宋の都、襄陽の攻略に手をやいていたクビライが、遠いペルシャから著名な回回砲の技術者、阿老瓦丁(アラー・ウッディーン)と弟子のイスマイル(二人ともイラク地方生まれ)を中国に招いたのは1271年だった。

史料によるとこれら軍事技術者の手によって北京で最新式回回砲が造られ、これによって南宋は滅亡されることになる。

従って中国はイスラーム文化圏の方から最新の知識・技術を学んだことにもなる。

反面、791年、唐の軍隊はサラセン(イスラーム帝国)の軍と中央アジア、タラス川をはさんで戦火を交えた。唐軍は敗れ、捕虜に

なった兵士の中に紙すき工がいた。彼らはサマルカンドへと連行され、そこで紙づくりをはじめることになった。パピルスや羊皮紙しか知らなかったイスラーム世界に安くて便利な中国式製紙法が伝わった。大局的にみれば、交流は互恵的だったと言えよう。

## 中央アジアのイスラーム復興

次にアルマティ市に泊まる。天山山脈の3千米級の山並みが迫っている傾斜地にのびのびと発展した都市だ。あちこちに小粒のリングが枝もたわわに実っていた。もともとアルマティとはカザフ語で「リングの里」という意味だそう。1996年より首都移転が開始され、北方のアスタラへ主要官庁は引越してしまった。北部に多いロシア系住民への配慮、中国国境地帯、新疆自治区に近すぎるなどの理由が挙げられているが、真の理由ははっきりしない。

カザフスタンの全人口は約1500万人(99年3月の国勢調査値)で最も多いのはカザフ系53.4%、それについてロシア系30.2%となっている。スターリン時代に極東より朝鮮系移民を多数強制移動してきたことで、現在10万人の朝鮮系市民が居住している。

新憲法(1995年制定)では国語をカザフ語とし、ロシア語を公用語と規定している。カザフ語はトルコ語と同様チュルク系言語に属するが、ソ連時代の教育の影響でカザフ人の3分の1はカザフ語を十分に使えないといわれている。

同じくソ連時代、当地のイスラーム教徒は宗教の自由を奪われマスジド、聖廟などは歴史的記念物、観光名所と化し、或いは廃墟となってしまったらしい。ソ連邦解体の後、特に改革・開放のムードの下に国策によって、

或いはエジプト、アラブ首長国連邦政府などの援助によって、アルマティ市各所にマスジドが建てられつつある（写真2-1）。たまたまウイグル系ウルムチ出身の医師夫婦に会った。一緒になかに入ってじゅうたんの上に座り、キブラ（聖地メッカの方向）を背にしてわれわれを出迎えたイマームの説話を聞いた。また復活早々のイスラーム寺院では土地の若い世代は祈祷の方法を知らないらしく、門前市の屋台にはお祈りの順序を図示したわらばん紙状の教科書とコーラン、祈祷用の手編み帽子、そして「ミスワーク」というアラブの伝統的歯ブラシ（天然の小枝）などを並べて売っていた。同じ机に馬乳酒-鼻をつく強烈なすっぱさ-が売られているのには驚いた。

また日曜日にはこのマスジドで何組かの結婚式が次々ととり行われていた。新婚夫婦は西欧式ドレスだったが、親族一党は色とりどりの民族衣装色彩だった。（写真2-2）

### フタコブラクダとヒトコブラクダのであい

7世紀以来、イスラーム潮流は西から東に

流れ、ヒトの移動もまず「知識を求めて」アラビア、ペルシャから中国の方向に起こった。しかしこれまで見てきた通り、イスラーム文化の先端技術は、回回砲の例でみる通り、中国側から求められ東漸した。とはいえ、陶磁器技術のように相互交流し融合したケースも注目され、その例はカイロのフスタート遺跡などにみられる。

さてアルマティのイスラーム寺院の門前市（といっても屋根に覆われたマーケット）で体格のよいロシア系のおばさんが売り場カウンターの向こうから行き交うお客さんにさかんに呼びかけている。ぶらさがっているラクダの看板は中央アジア系フタコブラクダ（バクトリア種）のづんぐりしたシルエットだ。（写真3）真っ白な乳は淡白で芳ばしい。カザフスタンの大草原ステップ特有な香りかもしれない。

この目前に迫っている天山山脈を越してカスピ海を抜けアラビア半島からマグリブに至る広大な地域-筆者の40年にわたる馴染みの地域-に行くとヒトコブラクダ（ドロメダリ-種）の世界となる。そして学説によるとこのラクダの原種は南米アンデス山脈地方あた



写真2-1 アルマティ寺院  
ひとりで礼拝するカザフ市民



写真2-2 カザフスタン・アルマティ市イスラーム寺院での結婚式

りに生棲するリヤマに求められ、進化の過程では、何百万年もかかってアリューション列島を越え中央アジアに到達したときにはフタコブになっていたらしい。そしてヒトコブの胎児の変化を観察すると妊娠初期フタコブなのに順次変形してヒトコブになって誕生してくるとアラブ人の専門家はいつていた。短かい11ヶ月の妊娠期間における胎児の変形過程はその種の進化の過程を如実に示すといわれる。…とするとラクダは東アジアから西方向への気の遠くなるような長期間の移動のうちに進化を経たにちがいない。カスピ海沿岸、イランのマザンダラーン州ゴンバドカーヴェース市郊外の草原地帯では両系の混合種がみられる。(写真4)もちろん…1½コブラクダだ。

\* \* \* \* \*

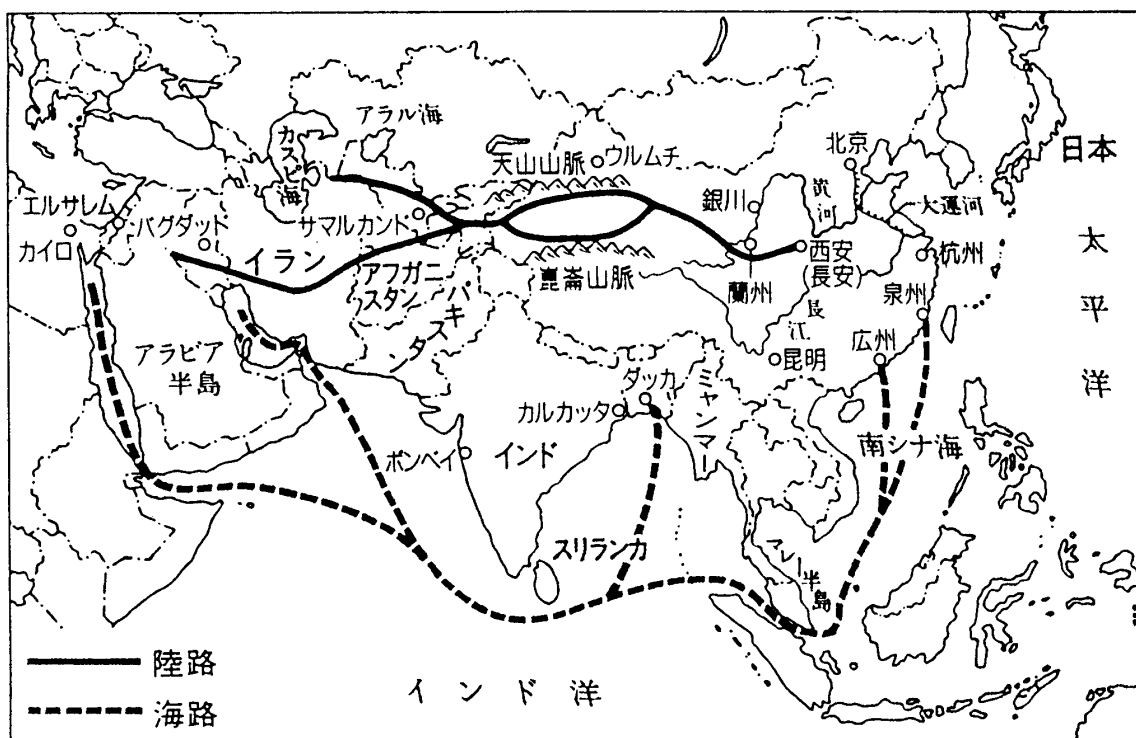
ふたたび、極東の島国日本に身をおいて眺めてみると、イスラーム潮流は西アジアの一角アラビア半島に起こり、現在に至るまでシルクロードを伝って中国にまで及び、そのう

ねりは中国から中央アジアに跳ね返っているように見える。唯一超大国米国が眼の敵にする『防衛ジハード』の要素もこの逆流の一環としてなかなか消去できないのが21世紀的矛盾といえよう。ヒト、文化と技術、そして動物が東西双方の交流過程で『ハイブリッド』と言う新しい価値を生みながら、力動的なプロセスを繰り返している。これまた21世紀的営為の実相であること……この辺に未来に向けて希望の灯があるのかもしれない。

以上

参照文献

1992.12 『賽典赤・瞻思丁世家』 今日中国出版社  
 張 承志 1993 『回教から見た中国』 中公新書  
 張 承志 [著] 梅村 担 [訳] 1993 『殉教の中国イスラーム-神秘主義教団ジャフリーヤの歴史』 亜紀書房  
 鈴木 肇 2002 『シルクロード鑑賞ガイド』 ユーキャン



(出典 「回教から見た中国」 より)



写真3 アルマティの門前市、ラクダ乳売場  
フタコブラクダのかんばん



写真4 イラン・カスピ海沿岸地帯のラクダ・ハイブリッド群

(写真はすべて筆者撮影)